

「心の闇」の内容分析

——三大全国紙を対象として——

和光大学 赤羽由起夫

【1. 目的】

本報告の目的は、「心の闇」という言葉の用いられ方の量的な動向を分析し、なぜ「心の闇」が用いられるのかを考察することである。

【2. 方法】

そのために本報告では、『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』のすべての「心の闇」に関する記事（以下、「心の闇」記事と表記）を分析資料として内容分析をおこない、その用いられ方について考察する。分析資料となった記事は、『朝日新聞』368件（1984年8月1日～2018年12月31日、「心の闇」441個）、『毎日新聞』307件（1987年1月1日～2018年12月31日、「心の闇」394個）、『読売新聞』421件（1986年1月1日～2018年12月31日、「心の闇」515個）の計1098件である。内容分析は、「心の闇」記事をその内容にもとづいて分類し、「心の闇」と同じ文中に出現する共起語を参考にして、その動向を分析する。

【3. 結果】

分析の結果、明らかになったのは、つぎの3点である。第1に、「心の闇」記事の内容は、「事件」（240件、以下、「事件」記事と表記）、「芸術」（734件、以下、「芸術」記事と表記）、「苦悩」（68件）、「その他」（55件）に分類できる。第2に、「心の闇」の共起語に着目して「事件」記事における「心の闇」の用法の典型例をまとめると、「少年の『心の闇』を解明できない」という文章に集約できる。第3に、「心の闇」の共起語に着目して「芸術」記事における「心の闇」の用法の典型例をまとめると、「人間の『心の闇』を描く」という文章に集約できる。

【4. 結論】

本報告の結論は、つぎの3つである。第1に、「心の闇」は、「事件」記事と「芸術」記事において異なった用いられ方をする二面性をもつ言葉である。第2に、「事件」記事は、「心の闇」を理性によって制御されるべき感情などの非合理的なものとみなす合理主義的自己像（片桐 2017: 89-115; Simmel [1917] 1920=1979: 93-130; Taylor 1989=2010）を背景として、それを解明しようとする視点から構成されている。第3に、「芸術」記事は、「心の闇」を人間性や個性を表す感情などの表現とみなす表現主義的自己像（片桐 2017: 89-115; Simmel [1917] 1920=1979: 93-130; Taylor 1989=2010）を背景として、それを描こうとする視点から構成されている。

【文献】

片桐雅隆, 2017, 『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』ミネルヴァ書房。

Simmel, Georg, [1917] 1920, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, 2te Aufl., Walter de Gruyter. (清水幾太郎訳, 1979, 『社会学の根本問題——個人と社会』岩波書店。)

Taylor, Charles, 1989, *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Harvard University Press. (下川潔・桜井徹・田中智彦訳, 2010, 『自我の源泉——近代的アイデンティティの形成』名古屋大学出版会。)